

ユネスコ会員綱領

- 心の中に平和の守りを固めよう
- すべての人間の尊厳を重んじよう
- 教育・科学・文化の発展に努めよう
- 民族間の疑惑と不信を除こう
- 世界を友愛と信頼の絆で結ぼう

高崎ユネスコ

<http://takasaki.gunma-unesco.com>

UST

発行所

高崎ユネスコ協会

高崎市高松町35番地1

(〒370-8501)

高崎市市民部

防犯・青少年課内

電話 (027)321-1297

第四十回子どもの幸せを考える研究集会

「子どもよ たくましく しなやかに」

講師 高橋宏明先生

令和二年十一月二十九日（中央公民館視聴覚集会室）

令和2年11月29日（日）中央公民館視聴覚集会室にて、

高崎ユネスコ第40回「子ども幸せを考える研究集会」が開かれた。このコロナ禍で人數や設営等の制約のある中にあって29名の皆さんが講演を聞いて学んだ。

講師は前県生涯学習センター館長で様々な役職経験を積まれ、現在も前橋市社会教育委員等歴任の高橋宏明先生で、演題にあるように子ども達にたくましさやしなやかさを育てる教育の必要性や方法等について話された。

講演の概要は以下の通りである。

まず現代の子ども達を取り巻く社会情勢については、バーチャル的で人ととのふれあいの少ない状況で、



高橋宏明先生

あいの少ない社会である。また少子化で大人との生活や活動も少なく経験が不足しておらず、たくましさの育ちにくい時代である。子ども達に先を見る目、つまりこの社会がどうなるかを見極める力を育てるにはたくましさやしなやかさを育てる必要があると考え、演題にした。

これから時代が子ども達に求める能力は、変化の激しい社会に適応できるように学校教育にとどまらず、社会に出て経験を積む学びも必要だ。また、今の国際化に対応していくためには日本人としての自覚を持ち、自國文化を理解し、多国共生の考え方を養う必要がある。興味のあることには自分から入り込み学ぶのが子どもである。たくましさやしなやかさを持つて多くの経験をさせたい。

手本のない日本社会だが、これから若者は自分で「な

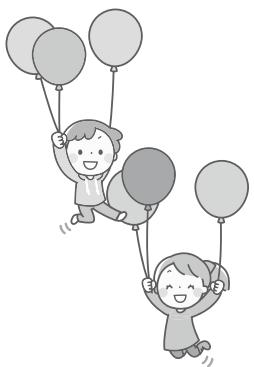
今は働き方も変化して人生100年の時代で人生設計も変わり、退職で終わりではなく再任用等マルチステージでの活躍が期待される。コロナ禍で働き方の変化やIT関係の増加で人ができることを機械がやる時代である。そのため余暇も生まれるので柔軟に学び、新たな挑戦をする人も



感染対策をとって



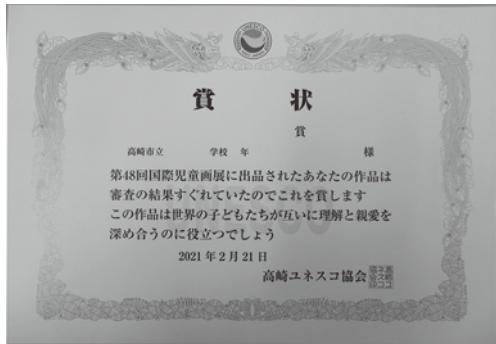
研究集会の様子



りたい自分」を作り上げる必要がある。学校が全てではないので、子どもの時から技を磨いたり様々な学びや経験をとおしてたくましくしなやかに育つてほしい。今の幸せが将来の幸せにつながるとは限らない。自分の幸せを自分でつかむためには、自分で自分を育てる必要がある。高齢化は進むが、私たち大人も生涯現役として次の時代を担う子どもを見本になれるような生き方をしたい。

講演を聞きながら、子ども達が今も将来も幸せに生きていくためには私たち大人も学び、生き方を示せる大人にならなければと自省した。海外で働いた経験もあり、多くの役職を任せられた高橋先生だから語れる講演内容に感銘を受けた。また機会があれば別の分野についての先生の示唆に富んだお話を聞きしたい。

(子どもの幸せ部 田中けい子)



賞状



記念品のスケッチブック

今年のユネスコ展は、各学校から提出される作品をいつも以上に厳選し、昨年よりは展示作品が縮小されたものの、多くの力作が展示されました。中には、とても時間をかけて丁寧に描かれた作品や、自分の思いをぶつける作品。鮮やかな色彩で技巧的にすぐれた作品など、とても

二〇二〇年はコロナ禍の影響で多くの美術館や博物館が、休館や展覧会の中止・延期が相次いでいましたが、秋になってようやく美術展が再開されたことをとても嬉しく思います。展覧会の再開を願っていた美術教師や、作品の発表の機会を待ち望んでいた子ども達には「待ちに待った日がいよいよやって来た」と感じたことでしょう。この高崎市でも多くの美術展覽会がなくなりてしまいましてから、今年のユネスコ展は例年になく特別に貴重な発表の機会となりました。

同じく高崎ユネスコ協会長賞に選出された「命に見つめられて」は、何重にも塗り重ねられた筆が、作者の強い思いを表しています。題名の通り、命の尊さを表現した素晴らしい作品でした。作者が「大切な牛だ。だから何度も何度も描くんだ。」という意気込みが筆さばきから

磨いたり様々な学びや経験をとおしてたくましくしなやかに育つてほしい。今の幸せが将来の幸せにつながるとは限らない。自分の幸せを自分でつかむためには、自分で自分を育てる必要がある。高齢化は進むが、私たち大人も生涯現役として次の時代を担う子どもを見本になれるような生き方をしたい。

そこで今回は、各学校に表彰状と記念のスケッチブックを送り、各校ごとに受賞者に手渡していました。

例年二月に行っていた高崎ユネスコ協会主催の高崎ユネスコ国際児童画展とユネスコ作文の合同表彰式は、新型コロナ感染防止のため誠に残念ながら中止となりました。

朱スコ協会では、児童生徒が式典の場で緊張しながら壇上に上がって賞状を受け取るのは、貴重な社会経験の一つになると想っていたので、本当に残念でした。

なお、今回より高崎ユネスコ協会の有志が先生方に混じって作文審査に加わらせていただくことになりました。児童生徒の気持ちがより分かって、とても良い経験ができたと多くの協会員が語っていました。今後も続けていきたいと考えています。

二〇二〇年はコロナ禍の影響で多くの美術館や博物館が、休館や展覧会の中止・延期が相次いでいましたが、秋になってようやく美術展が再開されたことをとても嬉しく思います。展覧会の再開を願っていた美術教師や、作品の発表の機会を待ち望んでいた子ども達には「待ちに待った日がいよいよやって来た」と感じたことでしょう。この高崎市でも多くの美術展覽会がなくなりてしまいましてから、今年のユネスコ展は例年になく特別に貴重な発表の機会となりました。

今年のユネスコ児童画展のコンクールの審査を終えて

中止となつた令和二年度合同表彰式

(2)指導講評と作品の紹介
高崎ユネスコ協会長賞

(1)各学校の先生方に感謝します

児童画の受賞者は90名、作文は50名でした。どの作品も大変すばらしく、作成の段階から審査まで全面的にご協力下さった高崎市内の小中学校の先生方に

はこの場をお借りしまして衷心より感謝申し上げます。

**国際児童画展審査委員代表
高崎市立片岡中学校 教諭 中澤 照幸**

バリエーションが多く、私たち審査員も楽しませてもらいました。これも、日頃から、ご家族や先生方の深い愛情を受けて指導を受けたからこそ、仕上げることができた作品だと思います。

今年も審査において、たくさん作品が選ばれました。日常生活の中ではほんの少し見方を変えただけで、世界が途端に輝き始めます。そうしたことを再認識させてくれた審査でした。

高崎ユネスコ協会長賞に選出された「オムライス」は、コレジュのような技法を使って、心の内面を表現した作品でした。空をくり抜いて描いたような人物像や、ギロリと光る眼など、作者の気持ちが迫つてくるようで、作品を見つめていると何か物語が聞こえてくるようです。また幾重にも重ねて描かれた筆遣いに、この絵に込める気持ちの強さを感じます。

感じられます。この絵を見た誰もが、牛に対する感謝や、大切なものを慈しむ気持ちを感じられたのではないでしょうか。

全体を見渡してみると、今年の入賞作品は、厳選された質

の高い作品が多かったように思っています。入選作品も多種多様で特色があり、鑑賞者を楽しませてくれたと思います。

審査では、その作品一点一点を見ていきましたが、繊細でこだわりのある描写、勢いのある筆致、大胆な色使い、描こうとする対象をじっくり見つめる目や優しいまなざし、工夫した画面構成など、その作品にしかないものを目にすることができました。ユネスコ展では、描く対象・内容、用いる画材を限定していないため、実際に多様な作品が寄せられます。そのため、作品には「自由」を感じます。子ども達は「自由」に、色やかに載せて自分の思いや願いを表現しています。

その表現は「趣味」といった言葉でのみとらえるものではなく、子ども達が生き、生活していくためになくてはならず、またその成長・発達を支えるものとして必要なものです。言葉によらないからこそ生まれる表現を、身近にある紙と鉛筆から専門的な画材までを使って、子どもたちが「自由」に描き発表で

きる機会を先生方や保護者のみなさまとともに、これからも支えていきたいと思います。

高崎ユネスコ協会長賞

命に見つめられて

高崎市立上室小学校
六年 高山 凜

この絵を描く前に、ある絵本を見て読みました。

その絵本の中には、牛の大好きな命を、ぼくたちは何も考えずに喜んで食べている、ということが描かれていました。

地元で牛の飼育をしている大字主任さんは、牛を出荷される時、なかなかトラックに乗ろうとしない牛に対しても、「今度生まれるんじゃねえぞ。」と言ひながらトラックに乗せるという話



命に見つめられて

ぼくは、一頭一頭に感謝の気持ちを込めて、牛をなでるよう何回も重ねなりました。時間はかかりましたが、そのおかげでしつかり描くことができました。かけがえのない命を表してくださいとでも大きく牛を描きました。

最高賞を取れたと知った時、この絵から命を感じて頂けたと思いつてもうれしかったです。

ありながら、仲が悪いのです。仲の悪い二人を描いた理由は、自分でもはつきりとはわかりません。この二人のミステリアスな関係を想像してみてください。

高崎ユネスコ協会長賞

「オムライス」

高崎市立大類中学校
三年 小島 遙

私がこの作品でオムライスを描いたのは、オムライスが好きだからです。普段から、絵をかくときには、全体のイメージを膨らませてから描くというより、描きたいものを思いのままに表現しています。

今回は、ただおいしくオムライスを食べているというのではなく、全体の雰囲気として暗い感じを持たれると思います。それは正解で、ここに登場している二人の人物は、仲が悪いことを暗示しています。知り合いで



オムライス

子ども達のエネルギーや
独創性、自発性が
感じられました

高崎ユネスコ協会作文部長
品田 京子

『高崎ユネスコ作文集』は、昭和四十九年三月に第一号が発刊されて以来、令和二年度で四十八回目の発行となりました。今年度も、高崎市内の児童生徒たちが、世界平和を願い平和の心を育てる内容の作文を公募しました。したところ、小学校は九百六十九編、中学校は三百九十四編、計千三百六十三編の作文が寄せられました。今年度は、コロナ感染症の影響で休校が長引いたため、無理のない程度での出品をお願いしましたが、予想以上に出品数が多かったのでよかったです。

審査は、例年では国語主任会の先生方にお願いしていますが、今年度は第一次審査を高崎ユネスコ協会の理事の方々にしていただきました。第二次審査会は国語主任会の先生方と合同で行い、本作文集の掲載通り、小学校二十七点、中学校二十三点の優秀作品を選定いたしました。

応募作品の題材は、世界平和、国際理解、国際協力、日本や地域の伝統文化継承、自然災害やボランティア活動など多方面にわたっていましたが、今年度は、特にコロナ感染症を題材とした優秀作品を選定いたしました。作品が目立ちました。内容については、自分の身边に起つたことや家族とのふれあい、社会貢献や人助けに関わる体験、伝統文化に関わる体験等を基に、平和を願い、よりよい世界や社会のために何ができるか、自分なりに考え、自分の言葉で発信していこうとする作品が数多くありました。どの作品にも、子ども達のエネルギーや創造性、自発性が感じられ、審査員に未来への希望と力を与えてくれました。子ども達の純粋な平和への希求を私たち大人がしつかり

と受け止め、平和な社会を築いていかなければならぬと改めて痛感しました。

最後になりましたが、第四十八回『高崎ユネスコ作文集』が、次代を担う子ども達に国際協力の精神を養い、平和の心を育てる一助になることを念じるとともに、応募にあたりご指導いたいた各学校の先生方や作文の審査にご尽力くださいました高崎市小中学校主任会、関係各位のご協力に、心から感謝を申し上げます。

兄さんが病気の子ども達のためにはみの毛をのばしているんだけれど、「しょにのばしてみんなで」と、ハドネーションにさそってくれました。

少しきんちようしながら大きな鏡の前にすわると、美容しさんとお母さんが、「ここまで、よくがんばったね。」

ハドネーションとは、小児ガンや先天性のだつ毛しよう、ふりよの事故などでかみの毛を失つた子ども達のためにきふされたかみの毛でウイッグを作り、した。ドキドキワクワクした気持ちで、美容しさんに活動に参加したいと伝え、私のちよう戦が始まりました。

それからは、多くのかみの毛がウイッグに使えるように、少しでも長くきれいにのばす努力をしました。大変なことがありました。大変なことがありますから、笑顔になると心のお金があたたかくなつて、とても幸せな気持ちになるからです。

私は、笑顔が大好きです。家族や友達の笑顔を見ると心がまたかくなつて、とても幸せな気持ちになるからです。

私は、こんなにも身近なところで「偏見」を目の当たりにするとは、思いもよりませんでした。体から熱いものが吹き出しそうになるのを必死に抑え、怒りをこらえました。しかし、同時に、その場にいて何も

できなかつた自分に、とても腹が立ちました。そこで私は、障害者と健常者との共生ができるといい現状に悲しみを覚えました。

八回『高崎ユネスコ作文集』が、次代を担う子ども達に国際協力の精神を養い、平和の心を育てる一助になることを念じるとともに、応募にあたりご指導いたいた各学校の先生方や作文の審査にご尽力くださいました高崎市小中学校主任会、関係各位のご協力に、心から感謝を申し上げます。

ハドネーションとは、小児ガンや先天性のだつ毛しよう、ふりよの事故などでかみの毛を失つた子ども達のためにきふされたかみの毛でウイッグを作り、した。ドキドキワクワクした気持ちで、美容しさんに活動に参加したいと伝え、私のちよう戦が始まりました。

それからは、多くのかみの毛がウイッグに使えるように、少しでも長くきれいにのばす努力をしました。大変なことがありますから、笑顔になると心のお金があたたかくなつて、とても幸せな気持ちになるからです。

私は、笑顔が大好きです。家族や友達の笑顔を見ると心がまたかくなつて、とても幸せな気持ちになるからです。

私は、こんなにも身近なところで「偏見」を目の当たりにするとは、思いもよりませんでした。体から熱いものが吹き出しそうになるのを必死に抑え、怒りをこらえました。しかし、同時に、その場にいて何もできなかつた自分に、とても腹が立ちました。そこで私は、障害者と健常者との共生ができるといい現状に悲しみを覚えました。

高崎ユネスコ協会長賞

高崎市立榛名中学校
二年 吉田 澄香

に迷惑そうに自分の子どもを彼から遠ざけたのでした。

少年の母親は、その様子を申し訳なく思つたのか、少しだめよ。」

「周りの人に迷惑をかけちゃダメよ。」

とたしなめた後、ばつの悪そうな様子で、

「すみません。」

私は、周囲の人々に謝りました。母親はその後、無邪気に笑う彼を静かに見守っていましたが、きっと心の中ではずいぶんと居心地の悪さを感じていたに違いありません。

私は、偏見など、絶対に許せません。ちようど一年前、私が家族と電車に乗っていた時、一人の男の子が、お母さんに連れられて入つきました。明るく元気そ

うな少年でした。しかし、電車

が走り出してすぐに、私は、その男の子が特別な気質を持つて、色々なことにちよう戦できるといいな。そして、友達をたくさん作つて、その子の周りにキラキラとかがやく笑顔が生まれ、どんどん広がるといいな

あとります。私は、こんなにも身近なところで「偏見」を目の当たりにするとは、思いもよりませんでした。体から熱いものが吹き出しそうになるのを必死に抑え、怒りをこらえました。しか

し、同時に、その場にいて何もできなかつた自分に、とても腹

が立ちました。そこで私は、障害者と健常者との共生ができるといい現状に悲しみを覚えました。

私は、パラリンピックを頂点としたパラスポーツが好きです。

スポーツを通して、障害者と健常者との共生へ、一步でも近づけられたらいなといつも考えています。

私は以前、姉と一緒に車椅子バスケットボールの試合を観戦

された日から二年後、いよいよかこでだれかの笑顔につながつていると信じて、今日も「笑顔の元」をのばしています。

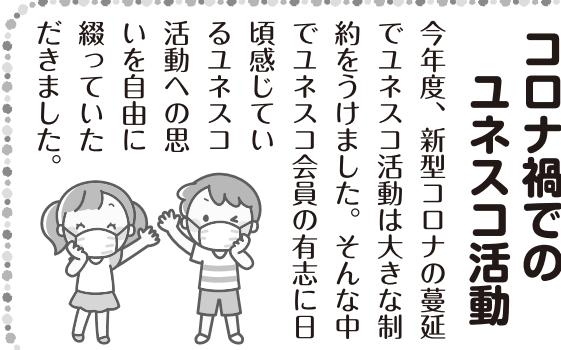
たくさんの笑顔は平和を生み出すから、私のかみの毛が、どこでだれかの笑顔につながつていると信じて、今日も「笑顔の元」をのばしています。

電車に揺られ、いくつかの駅を過ぎると、目の前の席が空きました。少年はその空席を見つけるとすぐに、そこをめがけて飛び込みました。その席には、また別の親子が座っていました。すると、先に座っていた子ども

の母親は、少年に對して、あからさまに不機嫌な顔を見せ、実際は、今、中学生のお



したことがありました。小さな体育館でしたが、中では、熱気が立ち込めていて、選手たちの意気込みがこちら側に強く伝わってきました。試合開始のホイップスルが鳴ると、車椅子に乗った選手たちは、コートを縦横無尽に滑り始めました。選手たちは、自分たちの乗り物がまるでスポーツカーであるかのように、風を切り、自由自在に操作ります。そこから、軽快なバスを繰り出し、見事にゴールネットを揺らすのでした。車椅子と車椅子が激しく衝突する音はずつしりと重く、選手が椅子もろともに転げ倒れるときの衝撃は、私たちを異常に興奮させました。鍛え上げられた筋肉。選手たちから噴き出す汗。人間のほとばしる生命のエネルギーを感じずにはいられません。私は、気がつくと、姉の手を握りしめ、興奮でお互いに顔を真っ赤にしていました。



コロナ禍での ユネスコ活動

今年度、新型コロナの蔓延

試合が終わり、選手たちはお互いのプレーを讃え合っていました。彼らの表情はとても明るく、さわやかでした。私は、その様子を見て、みんなとても前向きだと感じました。そして、気づきました。車椅子バスケットを通して出会った方々はみな、障害を自分の個性として受け入れ、その個性を最大限に生かそうと努力する集団だつたのです。素

敵なチームに出会えて、本当にうれしくなりました。
私が車椅子バスケットを観て、瞬で心が惹かれたように、もつと多くの人にもパラスポーツを見てほしいと思っています。そして、感動を味わってほしいです。健常者も障害を持つている人も、みな等しく個性があります。その個性を磨き続けることは人間として、誰もがしなければならない一生の課題だと私は考えます。

私はいつか、誰もが障害を個性と認められる社会を目指していきたいです。そして、差別のない世の中を築いていく社会人の一人として、世の中に貢献したいです。

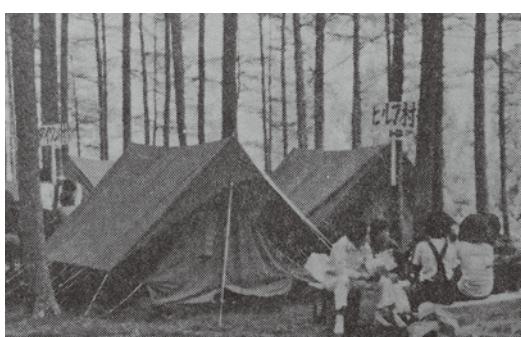
元キャンプ部長 秋山 信行
広報紙「高崎ユネスコ」の原稿依頼がありましたので、書かせていただきます。私が高崎ユネスコについて書けることは、ユネスコとの出会いと、主体的に取り組んだユネスコ活動についてです。

高崎ユネスコとの出会いは、高崎ユネスコ協会が誕生した昭和44年の少し前からです。当時社会教育課で黒須課長の下で仕事をしていた時に、高崎ユネスコ協会が誕生しました。

その際、本市のユネスコ活動のねらいを、主として青少年にユネスコの精神を植え付け、国際的視野を持ち、平和を愛する青少年を育成することとしました。青少年キャンプをはじめ、児童画展、作文募集、国際理解バス等の事業が順次開催されてまいりました。

その中で、私が主体的に取り組んだのがユネスコ青少年キャンプで、第1回のキャンプは昭和48年に西毛野外教育センターで実施しました。キャンプは、ほぼ自然に近い山林の中にテントを張り、穴を掘つて竈を作り、飯盒と鍋で食事を作るというものでした。幸い指導者も集まり、準備も整い、市内の小中学生に

参加を呼び掛けたところ54名の参加がありました。参加者のほとんどがキャンプは初めてでした。が、アジアの国々の名前を冠したキャンプ村を作り、キャンプに参加するまでお互いに面識のなかつた参加者が、自然の中で力を合わせることによって、キャンプ生活をたくましく有意義に過ごすことができました。



テント村で語り合う子ども達

作文部副部長 飯塚 幸江

ユネスコ活動と 子ども達

高崎ユネスコ協会では、寺子屋運動のほか児童生徒に関わる活動を主に行っています。部活動や習い事にと忙しい中でもユネスコ活動に参加する子ども達の活き活きとした笑顔は大変印象的で嬉しいものです。キャンプでは、初対面の子ども達がチームを組み、協力しながら慣れない火おこしや炊事など成し遂げています。帰りにおうちの方に迎えられた時の顔は、自信に満ちて出発の時より頗るもしく感じられます。おうちにも長く感じられます。おうちには帰つてから体験したこと誇らしそうに話すのでしょうか。今年ユネスコ作文の審査にわらせていただきましたが、身近に起つた平和や福祉問題に対する子どもらしい素直な表現に感動させられました。子どもが感じたこと、疑問に思つたことに真摯に向き合うご家族の温かさも目に浮かびました。

アリーダー、後にヤングフオーラムを結成したりし、知恵と工夫をもつて実施してきました。このキャンプを経験して育つた子ども達が、社会の様々な場所で活躍していると信じております。

一人で行動できる範囲は限られています。書物の中から学ぶたくさんの体験をすること、挑戦することが、からの成長の糧になり正しい事を見極める力となつていくのだと思います。ユネスコ活動がその一端を担えれば嬉しい限りです。

ユネスコ絵画展やキャンプに地元大学生がボランティアで参加し、若い力が場を明るくしだきな助けとなっています。彼らのような若者が将来ユネスコ活動に参加してもらえるよう、多くの人にユネスコ活動を理解してもらいたい人の輪を広げていけたらと思います。

コロナ禍で思う、 ユネスコの活動とは

作文部副部長 竹内 史子

二〇二〇年、自殺した小中高生が過去最多の四七九人、前年比一四〇人増だったという。コロナ禍での生活の変化が大きな要因の一つというが、彼らのその後の選択の時を思うと、胸の奥が絞めつけられる。

高崎ユネスコ協会では、子どもの幸せを願う活動を長年続けている。今こそこの活動を誇り、社会の中で活かしていくなくてはならないと思う。そして、幸

せを願うばかりではなく、こちらから働きかけていくことも大切だと思うのである。制約の多い世の中になつてしまつたが、知恵を絞り、慣れないデジタルを使した子どもたちへの積極的な働きかけは、私たち会員の励みにもなるのではないかと思ふ。世の中の流れに便乗して、ライブ配信やオンラインで講演会等を開催してみてはどうだろう。子どもが参加できるようならう。内容ならば、実際に同時に活動し合い、意見交換だってしてもらおう。このように少々前めに訴えてしまるのは、最近、日本ユネスコ協会連盟で配信している「カンボジア オンライ

ン スタディツリー」を見て、なんだかとも感動して勇気をもつたからかもしれない。カンボジアの寺子屋も、新型コロナの感染拡大の影響で閉鎖となるが、学習者は皆カメラの前で勉強への意欲を語っていた。その後の寺子屋の再開の様子や街中のリアルなマーケット歩きの様子、日本の高校生とのやりとりもあり、海外との交流の意義を改めて感じた。そして、この世界の広さ面白さを子ども達の目に前に示し続けることが、悲しい選択を減らす一助となると痛切に思った。

高 峰 協

地元大学生がボランティアで参加し、若い力が場を明るくしだきな助けとなっています。彼らのような若者が将来ユネスコ活動に参加してもらえるよう、多くの人にユネスコ活動を理解してもらいたい人の輪を広げていけたらと思います。

ユネスコ活動がその一端を担えれば嬉しい限りです。

ユネスコ絵画展やキャンプに地元大学生がボランティアで参加し、若い力が場を明るくしだきな助けとなっています。彼らのような若者が将来ユネスコ活動に参加してもらえるよう、多くの人にユネスコ活動を理解してもらいたい人の輪を広げていけたらと思います。

社会教育功労者表彰を祝して

長年高崎ユネスコ協会の活動に携わって来られた田中けい子氏が令和二年度の高崎市社会教育功労賞を受賞されました。

氏は高崎ユネスコ協会による各種活動の活性化や、組織の維持・発展のために多大な貢献をなさいました。現在も事務局の会計、子どもの幸せ部長と要職を兼務しておられます。本誌上にてお祝いの言葉を述べさせていただきます。

誠におめでとうございました。



お祝いの花を贈呈

あとがき

人は、植物なり動物なり他の生命を食べて生きている。

その当たり前のことを、静かに、しかし熱く語ってくれたのは、ユネスコ国際児童画展でユネスコ協会長賞を受賞した高山凜君である。

「今度生まれてくる時は、牛になんか生まれるんじゃねえぞ」と、出荷の際なかなかトラックに乗ろうとしない牛に語りかける飼育場の主任さん。その言葉を聞き、胸を痛めながら一頭一頭に感謝の気持ちを込めて牛をなでるように何回も重ね塗りをした高山君。

パンダなどは何億円もかけて大切に大切に飼育されるのに、牛や豚や鶏は効率よく飼育され、効率よく屠殺される。ああ、なんたる不平等！なんたる人間の身勝手！

日本における食品ロス、つまり食べられるのに廃棄される食品は年間600万トンにも上る。生きるために奪った生命はすべて食べるのが食物連鎖の頂点に君臨する人間の最低限の礼儀であり責務ではないか。

自分自身のことを棚に上げて少し熱くなり過ぎた。それは、高山君の牛を思う優しい気持ちがとても貴く感じられ、深く心に沁みたからである。(三浦)